

大輪のバラを

ラオスで咲かせよう

日本有数の花の生産地として知られる愛知県田原市。
その栽培技術を生かしてラオスの花卉産業の活性化を後押ししようと、
バラの栽培方法を伝えている。

【愛知県】

田原市



愛知県田原市

面積188.81平方キロ、人口約6万6,000人。2003年、旧赤羽根町が旧田原町に編入合併され、田原市に。05年には旧渥美町が編入合併され、現在に至る。1968年の豊川用水の通水以来、地域の農業が飛躍的に発展。野菜・花卉に代表される、全国有数の農業地帯として知られる。88年より、JICAが実施する農業分野の研修事業に協力、研修員滞在中のホームステイや交流会など、地域ぐるみの異文化交流を積極的に行う。05年の「愛・地球博」以来、ラオス・サイタニー郡との交流事業に力を入れている。

途上国に広がる田原の技術

愛知県の南端、渥美半島に位置する愛知県田原市。大きな河川に乏しく水不足に苦しみ、小規模ながらも農業と漁業で暮らしていたこの地域では、約40年前に豊川用水が全面的に通水し、農業の近代化・先進化に成功。国内有数の農業地帯へと生まれ変わり、今や野菜、花卉などの農業生産額は全国の市町村でトップクラスを誇る。中でもキクやバラ、カーネーションといった花卉類は、同市の全農業販売高の約半分を占める代表的な生産物だ。

そんな技術と経験を生かし、田原市ではJICAが実施する農業分野の研修を20年以上受け入れている。地元農家や農協といった地域の協力のもと、開発途上国の研修員に対し、生産技術やかんがい・排水技術などを指導している。

そして同市が今、力を入れているのが、2005年の「愛・地球博」をきっかけに交流が芽生えた国、ラオスへの国際協力だ。万博の参加各国と県内の市町村が交流を深める「一市町村一国フレンドシップ事業」によって生まれた縁で、田原市の農業技術やその高い収益性に注目したラオスが、同市に協力を依頼。田原市はJICA中部の草の根技術協力を通じ、首都ビエンチャンの郊外にあ

※鑑賞用に栽培する植物。鑑賞する部分により、花物、葉物、実物などに分かれる。

サイタニー郡からの研修員を受け入れ、バラの栽培を一から指導してきた農家の太田小八さん(左)と、現地で技術指導を行った富田さん。太田さんは35年間バラを作り続けている“職人”



田原市で4カ月の栽培実習に臨んだトンスックさんとアヌンさん。滞在中には市内の小学校を訪れ、子どもたちとの交流を楽しんだ

るサイタニー郡で、バラの栽培技術を指導することに。その一環で07年11月から、サイタニー郡農林事務所、トンスック・ボウリカーンさんとアヌン・バンダヴォンさんが、市内のバラ栽培農家で約4カ月間の栽培実習を受けた。

バラ栽培を普及させ農家の生計向上を

近年、ラオスでは花の需要が増えているが、寺院への参拝で供え物としてよく使われるマリゴールドを除き、大半をタイやベトナムからの輸入に頼っており、価格も割高だ。バラはホテルなどでよく使われるほか、新年や卒業式のシーズンにも需要が高くなるものの、国内ではほとんど生産されていない。農業生産力を向上させたいラオスにとって、収益性の高いバラの栽培は魅力的であり、主に稲作に依存する農家の新たな収入源としても期待されている。

田原市での実習を振り返り、「優れた生産性と高い技術、農家の人々の勤勉さなど多くを学んだ」と話すトンスックさんとアヌンさん。帰国後、彼らが中心となって準備を進め、08年12月からサイタニー郡農林事務所試験用農場などで試験栽培が始まっている。

「日本とは土の質や気候が異なり、設備も不十分で、初めは思うように

花が咲かなかった」と話すトンスックさん。害虫にも悩まされた。だが、田原市の栽培農家や技術者がこれまで3度にわたりサイタニー郡を訪れ、技術を指導。土壌の改良や肥料・殺虫剤の使い方、剪定作業や花摘み、水やりなどについてアドバイスし、現地の気候風土に適した栽培手法を伝えてきた。さらに、毎月トンスックさんらから送られてくる栽培経過の報告書への返信・指導も行っている。またJICAも、苗や農機具、肥料など必要な資機材面で協力してきた。

バラはこの半年で2回花を咲かせたが、支援の成果もあり、今年4月に咲いた2番花は前回のものよりも出来が良く、商品化のめどが付きつつある。現在は、夏に咲く3番花の市場への出荷を目指し、これまでの教訓も生かしながら栽培に取り組んでいる。また、いずれ郡内の農家にバラ栽培を普及させるため、配布用の苗1500株を用意しているほか、初心者向けの栽培手引書も作成しているところだ。

これまで2度、現地で指導に当たってきた花卉栽培歴45年の富田政彦さんは、「よちよち歩き」の段階ではあるが、まともな農機具もなく、専門的な農業知識も乏しかった当初に比べれば、ここまで育てられたのは立派」と目を細める。

「最近バラのことばかり考えてい



現在、ラオスの市場で売られている花の大半は、タイなどからの輸入品だ

田原市のキク農家で温室栽培を見学するJICAの研修員。「研修の受け入れは、日本の農家にとっても自らの足元を見直す良い機会」と、田原市政策推進部の三竹雅雄さんは話す



通常は、試験場に隣接するため池からJICAが供与したポンプで水を引いてくるが、時には土の乾き具合に応じて、水のやり方も異なってくる(撮影:久野真一)